

巻頭言

現代社会におきたパンデミックを経験して、 これからの公衆衛生学に求められること

第16回信州公衆衛生学会総会 大会長
川原 一郎

新型コロナウイルス感染症は、私たちの様々な活動に変化を及ぼしています。本学会の開催形式であるインターネット経由で会場外からも学会参加できるハイブリッド形式もその一つでしょう。

学会や企業の会議だけでなく、小中学校の授業までが自宅でのweb視聴になるなんて、コロナパンデミック以前の3年前には予想されていませんでした。様々な社会に予想していなかった影響が出てきました。産業において強みと信じられてグローバル化されたサプライチェーンは、至る所で寸断され、産業構造の脆弱性となってしまいました。一方で、新型ウィルスのワクチンが驚異的なスピードで開発実用化され、製薬技術の進歩も広く認知されることになりました。

本学会の理事を務められている保健所の先生方の最前線での活動は、広く報道されて地域住民の信頼できる情報源として機能しています。また、新聞テレビなどのマスコミには「公衆衛生」の肩書きを持つ専門家が登壇し、「公衆衛生学」のなんたるかを実学として社会に認識させました。

これまでも、「公衆衛生学」は、ほとんどの医療系学校において教育機会があり、わたしの所属する歯科大学病院でも「公衆衛生学」は重要な教育・研修項目となっていますが、はたして、現在起きていること、必要なことをどれだけ教育できていたか自問しています。これからの「公衆衛生学」の教科書には、新たに追加すべき「予想できていなかった」事項が多く出てきたように感じています。

新型コロナウイルス感染症の拡大は、「公衆衛生学」の重要性や果たす役割の大きさを、改めて社会全体に知らしめることになりました。

今年の信州公衆衛生学会総会は、塩尻市の松本歯科大学を会場にして行われます。感染症対策一辺倒な社会情勢ではありますが、生活習慣病対策もおろそかにはできません。大会スローガンの「まもる健康、つくる社会」には、そんな思いを込めました。ウィズコロナ、アフターコロナの生活習慣病対策、保健活動を考える学会にできればと期待します。